

■ 南山大学 人間関係研究センター 公開講演会

置かれたところで咲く

2015年6月18日(木) 18:30~20:00

南山大学名古屋キャンパス フラッテンホール

渡辺和子氏

(学校法人ノートルダム清心学園理事長)

司会(グラバア) :

私は、本日司会をさせていただきます、当研究センターの研究員のグラバア俊子と申します。どうぞよろしくお願いたします。

今、シスターにご登場いただきました。

シスター渡辺は、ノートルダム清心学園の理事長を現在していらっしゃいますが、1963年からほぼ27年間にわたって、清心女子大学の学長を務めていらっしゃいました。そして、今日もお話を聞きますと、学生さんの授業をまだやっていらっしゃると。明後日も90分の授業をなさると。それが一番大事だとおっしゃっていました。本日もシスターの教え子さんも来ていると聞いております。

本日のシスターのお話は、8時までの予定にしております。そして、シスターのお話が終わりましたら、本日はそれでこの会を閉じさせていただきますと思っております。特に質疑応答ということは予定しておりませんので、どうぞご了承ください。

それではシスター、よろしくお願いたします。

渡辺 :

ただ今ご紹介をいただきました、渡辺でございます。

私は、来年でちょうど80周年になります、昭和の大クーデターといわれた2.26事件。その兵士たち、将校たちに殺されました父を、1メートル私の離れたところで見届けた唯一の人間でございます。43発、弾が父の体には入っておりました。そして青年将校たちがとどめを刺して、父と私が休んでおりました部屋から出て行く、その姿を見ました。

2月26日、東京で珍しく大雪の降った日でございます。その真っ白な雪の上に点々と赤い血が残っていた。私はまだ小学校の2年生だったと思います。早生まれで9歳になっておりましたけれども。それを見た私にとって、本当にか

けがえのない父でございました。

私の姉が私よりも22歳上で長女としておりまして、その姉が自分の最初の娘を、同じ昭和2年でございますけれども、産むようになっておりました。四人目の子どもとして2月、零下24度の日でございましたそうです。

北海道の旭川というところに、父は師団長として赴任しておりました。その父が、母がためらっているのを止めまして、「男が子どもを産むのはおかしいけれど、女が子どもを産むのは恥ずかしいことがあるものか」そう言って、私を産ませてくれました。

私はそういうことがあつてか、よくラジオなどで申しますけれども、小さなお腹の中にいながら、外の世界でどれほど自分を待ち受けているか、喜んで待っているか、そういうことが、分かるものだと思います。私自身はそのようなことで、生まれたときから、「生まれてきてすみません」という、そういう気持ちを持って今日に到っております。

これはやはり学生たちに、「子どもはね、祝福して産んでちょうだい」と、今も言っておりますけれども。本当にお腹の中にいながら、私は必ずしも望まれて生まれてくるのでない、そんなことを感じて生まれました。一番喜んでくれたのは父でございました。本当に目に入れても痛くないほど、私をかわいがってくれました。

その私にとっても大事な父親をたった一人…証人という姿で死に様を見た人間でございます。私が生まれて初めて見た死というもの。それは43発の弾を受けて、体中本当に穴ぼこになって死んでいった父でございました。

母は非常に気丈な人でございまして、そのときも涙一つこぼさないで、残された三人の、私が一番下で、その上に三つ年上の兄、またその上に三つ年上の長兄と申しましょうか、長男がおりまして、その三人を厳しくしつけてくれました。とにかく口答えは一切許しませんでしたし、「我慢なさい、努力なさい、不自由をいとわないように」そういうことを教えてくれました。「世の中というものは、自分が思うままになると思ったら大間違い。思うままになったら感謝をなさい。ならないのが当たり前。そして、私があなた方を厳しくしつけるのは、その思うままにならない世の中にあなた方は出ていくのだから、そこで生きていくことができるように。その難しさというものと対峙する。それと対面して、そして乗り越えていくことができるように」。

ですから、特に私など母に、「お母様、みんなこういう物を持っているから私も欲しい、買ってちょうだい」と申しますと、母は、「今ある物で十分です」と。そして、「私があなた方をこういうふうにしつけているのは、あなた方が今喜ぶ顔を見ようと思っていないから。それよりも、苦しいことにあったときにそれを乗り越えていくことができる、そういう大人にあなた方一人ひとりを育てたいからだ」ということを言っておりました。

これは、やはり母自身が、父も母も実は愛知県の人間なのでございますけれども、そ

の愛知から東京のほうへ出てきていろんな苦勞があったと思うのです。その苦勞を一つ一つ自分が乗り越えていった。その強さというか経験、それに裏打ちされた言葉でございましたから、私たち子どもも決して喜んではおりませんでしたけれども、お母様のおっしゃることはありがたい、つまり愛情の表れなのだということを、年が経つにつれて思うようになったと思います。

私はその母に初めて反抗いたしました。それは18歳のときでございました。私どもの家系は浄土真宗の家でございました。ところが私が父の、ある意味でむごたらしい死を見た唯一の人間だったものですから、姉と母が非常に心配をいたしました。この子はミッションスクールに入れたほうがいいと思うというので、小学校は成蹊小学校だったのですけれども、中・高は四谷の雙葉に私を入れてくれました。

それまでは何でも言うとおりにしておりました私が初めて母に、「私は何もかもお母様のおっしゃるとおりにする人間ではありません」、ということを宣言したような形で、カトリックの洗礼を受けました。それを聞きましたときに、母は大変立腹をいたしまして、「あなたの父親もご先祖様もみんな浄土真宗だった。なのに、あなたは特に今」、戦争の終わりごろではございましたけれども、戦争中だったものですから、「それなのに、なぜあなたはそういう敵国の宗教といってもかまわない宗教に寝返るのか。そういうものに改宗するのか」と言って本当に怒りました。

でも私は私で、それまでのいろいろな鬱憤がたまっていたのだと思いますけれども、さっさと荻窪の家を歩いて出まして、途中で空襲警報・警戒警報、ご存じの方も少しはおいでになると思いますが、その敵機が来たということで、だから防空壕の中に入りなさいと。それを何度も何度も聞いては防空壕の中に入っては出て、そして交通網はその前の空襲でずたずたに切れておりましたものですから、荻窪から四谷の雙葉まで一人で歩いて行きました。

そして、夕方近くまでかかったものですから、その晩一晩泊めていただいて、翌朝上智大学のロゲンドルフとおっしゃる神父様に洗礼を授けていただきました。そのときに、神父様もとても面白い方だったのですけれども、洗礼を受けるにはちょっとしたテストがありました。そのときに、いろいろ神父様からお尋ねがあってそれに答えて、その一つに三位一体という言葉がカトリックではあるけれども、「三位一体とは何ですか」、とお尋ねになりました。いや、どうしよう、「分かりません」、とお答えしました。そうしたら神父様は、「それでよろしい」と。そういう意気が投合いたしまして、神父様にはとにかくカトリックの洗礼を授けていただいて、そして家に戻りました。

母はそれから3日間、口を利かないで、自分の腹立たしさ、自分の怒りというものを私に示しました。でも、とにかくまだ戦争がたけなわだったころだったものですから、いつの間にか和解をいたしまして、そして、それから先、これが実は私を今日の私に、ある意味で育ててくれたと思うのです。

今まで、「努力しなさい、我慢しなさい、不自由を耐え忍びなさい」、と。その母の教えはそうでしたが、それよりももっとつらかったのは、洗礼を受けて戻りましてから、ことあるごとに私に、「それでもあなたはクリスチャン」、という言葉投げつけて、なじってくるのでした。

「私の反対をあれだけ押し切って勝手なことをしておきながら、今のあなたを見ると全然変わっていない。昔と同じ高慢ちきで、昔と同じ意地悪で、人の悪口を言う。それでもあなたはクリスチャン」、その言葉は教会でのお説教よりも、私にとっては痛い言葉でした。

つまり、非常にこのむごたらしい父の死を、目の前1メートルで見ていた人間だったものですから。しかも戦争はたけなわで、B29が何かに乗っていたアメリカ兵の顔が見えるようなところで、機銃掃射を受けました。

ありがたいことに、うちは焼けないで残りました。母が負けん気の人でしたから、「何が何でもあなたはお父さまの名前を汚すようなことをしてはいけません。勉強しなさい、我慢しなさい、努力しなさい」。そういう言葉をずっと聞いておりまして、私なりに努力もしましたし、我慢もしました。そして、成績はかなりのものを取っていたと思います。ところが、私の心はちっとも優しくなっておりませんでした。

荻窪の駅を降りて私のうちに戻りますところに、四面道という道が分かれているところがありました。私は雙葉の二人のお友達と一緒に、防空頭巾をかぶって、そして荻窪の駅を降りて、四面道まで歩いていきました。四面道で三人が別れるわけですが、そのときにお二人の私の雙葉の同級生が私に向かって、「和子さんは鬼みたい」、とおっしゃったのです。

私は今でも覚えています。おっしゃった方お二人の名前も覚えています。よっぽど自分が悔しかったのだと思います。そして、本当に母の言葉は気にしなかった私でしたけれども、その二人の雙葉のお友達が本当に正直に、「和子さんは鬼みたい」とおっしゃったのには参りました。よっぽど冷たくて、お友達たちに意地も悪かったし、助けても差し上げない、自分さえよければいい、私さえ一番でいれればいい。それを母が要求しましたので、私も本当に勉強して、結構よい成績を取っていたと思います。

ところが、それは結局、人様に対してのぬくもり・温かさ・優しさ、そういうものに欠けた自分だったのです。そして、それを母も、「それでもあなたはクリスチャン、あなたはキリスト教に改宗すればもう少し優しい人に、思いやる人に。母親に対しても」。私は母の44のときの子どもでございまして、そのころ母も70近かったかもしれません。鬼のままで死にたくない、という気持ちでございまして、聖書を、雙葉のマグムが、シスターがくださった聖書を読んでみました。

私は本当に不勉強な人間で、あまり聖書を勉強していない人間なので、でもやはりそのときに、聖書に何かよいことが書いてあるかもしれない

なと思って読みました。

テサロニケというところの信徒にパウロという人が送った手紙がございまして、ご存じの方も多いかもしれません、割によく使われる言葉です。

『いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、神があなた方に求めていらっしゃるることなのです』、とテサロニケの信徒への手紙一の、5章16節から18節までに書いてあります。

私はもしかしたら、これが私には足りなかったのかもしれないと思ったのです。

いつも喜んでいなさい、つまり私には笑顔がなかったのです。

絶えず祈りなさい、私も手を合わせることはいたしました。特に、私どものうちは仏教でお仏壇もあれば神棚もあります。そして、子どもはミッションスクールに通っている、そういう、ある意味で非常に日本的な家庭でございました。

私はどういうわけか、皆さんお信じにならないかもしれないですけども、わりに運動神経はあったのですけれども、かけっこだけはだめだったのです。いつもビリか、近くで。私の兄二人は、インターハイにも出たぐらいの人で、姉も結構運動神経がありました。

私はいつも運動会がくるたびに不機嫌になりまして、神棚のところに行って手を合わせて、神様どうぞ私がビリになりませんように、と祈ったのです。

母もそういう私の姿を見ていますから、「かずちゃん、おかえりなさい、今日運動会で何等だった」、「お母様、3等だった」、「ああ、よかったわね、何人で走ったの」、「3人で」という、もう本当におかしな家庭でございました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。この絶えず祈るというのは、決していつもチャペルに行き行って祈っている、いつもロザリオを繰って祈っている、いつも何かしら唱えて祈っている。そうではなく、私はこれは習いました。祈りの大切さはチャペルを出てからのことだと。チャペルで感じたことをお話しして、そして自分の悪かったことをおわびして、自分の良かったことに、ありがとうございます、と感謝して。そしてチャペルを出た私は、今チャペルにいたことによって、祈ったことによって、前よりもちょっとでもいいから、まじな人間になっているかどうか、そういうことが試されていたと思います。

絶えず祈りなさい。これは自分のため、私が1番になる、私がこういう成績を取る、ではなくて、今苦しんでいらっしゃる方、難民の方、または、伝染病で苦しんでいらっしゃる方、いろいろな方がいらっしゃいますね。そういう方たちのために絶えず祈る。

どんなことにも感謝しなさい。これは難しゅうございました。特に東日本の大震災があったり、火山の爆発があったり、私どもの近くの広島で水害がございました。そういうときに学生たちがまいりまして、「シスター、神様はいらっしゃるのに、どうしてこういうことがあるのですか」、と。私は、「分からない、

ただ一つ言えることは、人間は神様ではない。この世の中で、完全な方は神様しかいない。だから、あれは天災又は人災なのですよ」、と。「この人間の世界に、どうしてもそこから消すことができない人間自身の弱さ、それが交通事故を起こしたり、または、飲んではいけないお薬を飲んで、そしてほかの方を殺めたり。いろいろなことがあるけれども、神様に責めを負わせてはいけない。神様はそういうものの後始末をしてくださる方で、それで私たちは、いつの日か、ああ、あのことがあったおかげで、ということが言えるようになる。これは私が、あなた方よりもずっと年をとっている、その私が経験から言えることなのですよ」、と。

私は確かに父があんなに無残に殺されたときは、とても悲しゅうございました。ただ、殺した人たちを恨みはしませんでした。でも、後になって、やはり私の母は偉いと思うのですけれども。私が20代のときに母が、「和ちゃんね、お父様は本当にいいときにお亡くなりになった。もし生きていたら、今ごろは戦犯で絞首刑になっていたと思うけど。なのに、あのときにあんなつらい思いをしてお亡くなりになった。そのおかげで、私たちこの家族はお父様を恥じないで済む。お父様のもっともつらい思いを見ないで済んだのよ、だから感謝しないといけない」、と。信者でもないのですけれども、母がそう言ってくれました。

そういう言葉を聞いておりましたものですから、私も、どんなことにも感謝しなさい、すぐに感謝はできませんし、すぐに感謝できることばかりでは決してありません。ただいつの日か、それは死ぬ間際かもしれません。でも、「神様ありがとうございます」、という言葉を出して死にたいと思っております。

母とそういういがみ合いもございましたけれども、やはり戦争、そして戦後、日本は負けまして、和解せざるを得なく、特に私の二人の兄、上は技術者でございまして、当時の八幡製鉄から結構お仕事を戦後もさせていただきました。

2番目の兄は職業軍人でございまして、幼年学校から士官学校という道を歩いていたもので、戦争に負けたときに、つぶしが利かなかったのです。たぶん22~23だったと思います。「自分は、これから生活をするにあたって医者になりたい」、と言いまして、おかげさまで医学部に入って、そして、卒業をして結婚をして、自分の診療所も持つようになりました。

私はありがたいことに、母が、これからは今まで私がしていた国文科のお仕事よりも英語が必要になるから、英文科に入り直しなさい」、うちは軍人の恩給、扶助料、そういう年金的なものは全部取り上げられて、とても貧しかったのですけれども、その母が、「これからは英語の時代になるからアルバイトをしてでも英語を習いなさい」、と。

そこで私は一つ東京聖心の国文科を出たのですけれども、もう一度英文科に入り直しました。そうしたらありがたいことに、その次の年に女子の新制大学が始まりまして、確か、五つ許された大学のその一つとして、東京の聖心がご

ざいました。それで横滑りをいたしまして、東京聖心の英文科の2年生に入れます。すぐにアルバイトを始めて、上智の国際学部の秘書に雇っていただき、学校の合間、合間に上智に、ときには夜遅くなって、お仕事が終わってからうちに帰っておりました。

そのころは、母も家庭が非常に貧しくて、困って窮乏していたものでございますから、とにかく現金を持って帰るのは、私だけなのです。一番上の兄はちょっと事情があってうちに帰れない、二番目の兄は医者勉強でアルバイトができない。そこで、私が唯一の稼ぎ手でございます、そんなこともあって母もいろいろなことを許してくれました。

そして、上智でいただいたお仕事がとても面白かった、アメリカ人相手だったのです。アメリカ兵たちが、日本の国にたくさんまいりまして、昼間はお仕事がある。ただ、夜を持って余っていたのです。そこで上智の、特にアメリカからたくさんのお父様がおいでになっていたのです、そのお一方が良いお考えをお出しになって、夜は空いている上智の講義室を使って、勉強したいアメリカの兵隊さんや将校さん、またはご家族の方、そういう方たちのために、夜学をお開きになりました。

誰かセクレタリーが要するというので、私もその第一期のときから雇っていただきました。そして、東京聖心大学を無事に卒業してから続けて来るように、というお言葉をいただいて、計7年間キャリアのようなことをいたしました。ふっと気が付いたら、29歳だったのです。下の兄もおかげさまで、医者になる免許をもらっておりましたし、結婚もいたしました。

そのころは、家の中からいわゆる尼さんが出る、という言い方をしているらしいけれども、尼さんが出るのは何か悲しいことがあるから、という言葉があったので、私はとにかく2番目の兄がきちんとした結婚ができるように、そこまで見届けて、30歳が年齢制限だった修道会に入れていただくようになりました。

ですから、私は割に修道者としても年をとって入った人間で、おかげさまで英語が少しできたものですから、一人だけボストンの大きい修練院に送られて、そこで1年間修練期というのを過ごしました。

そのときに母が横浜まで送ってくれたのですけれども、そのときに母がこう手を振って、私がプレジデント・ウィルソンという、2等船客になって、これからアメリカに。修道院というところは命令で動きますから、命令で行くのです。

「和子が帰って来るまで私は生きていられるだろうか、帰って来たときにもし修道院が務まらないようだったらば、この子のために今まで使っていた着物・宝石、そういうものを残してやっておきたい」と、そういう母の本当にありがたい気持ちを、横浜の埠頭で手を振りながら、考えて見送ってくれました。

ボストンのほうで修練をさせていただいて、それからこれまた命令で、学位

を取って帰るようにと。それも、いわゆるPh.D.という割に良い学位なのだと思いますけれども、それを取って帰るようにと。私も母があと5年ぐらい生きていてくれるだろうかと思いましたが、命令ですし、もう自分が決心をして入った修道院ですから、そこで修業を、同時に勉強をさせていただきました。

その修練期という、入ってすぐの1年間、私はいろいろなお仕事を。そのころは100人ほど、シスターの修練をしている方たちが、アメリカにいらしたのです。

今、カトリックのシスターに入会なさる数は本当に少なくなりました。私どもの修道院でも、後が続きません。今、それが一つの大きな問題なのです。あまりにも世俗化した修道院と同時に少子化の時代で、ご実家のお父様・お母様が自分の娘の子どもを見たい、おじいちゃま・おばあちゃまが孫の顔を見たい。だから、修道院なんかにはやらないでと。そういう、どうしても時代の世相だと思います。

そんなこともございましたけれども、私がアメリカへ行ったころは100人ほどの修練女がおりまして、そして私たちはみんな手分けをして、お手洗いの掃除、お庭の草取り、アイロンがけ、または洗濯物干し、お食事の下ごしらえと、いろいろなことを命ぜられました。

私は、8月のとても暑い日でございましたけれども、お皿並べ、配膳をその1週間、自分の義務として働いておりました。そして、そのころはまだ本当に、私は三十いくつ、今から五十何年前でございますから、エアコンなどもございませんので、汗をだらだら流しながら、これよりも、もっともっと複雑な修道着を着てお皿を並べておりました。

私も行った当初は、これが修道院なのだ、何でも言われたことを言われたようにする。初めは、ちょっと幼稚園に逆戻りしたのではないかと思ったこともございましたけれども、「ああ、こういうことに耐えなければ」と。自分としてはばかばかしいと思うような、キャリアをしていた人間としては、「どうしてこんなことまで院長さまに聞かなきゃいけないの」、というそういう気持ちを持っておりましたが、でも何とかそれに慣れて、配膳で100人のお皿を並べて、その脇にコップを置いて、フォークとナイフとスプーンを並べて、そしてパイプイスを一つ一つの前に置いていく。

ある意味で、小学生でもできる仕事なのです、肉体労働で。そして、ある意味で易しいお仕事、そんなことが自分の心の中に生意気に入ってきておりました。

そうしたら、後ろに修練長、アメリカ人の背の高い50代ぐらいの方でしたけれども、立っていらして、「あなたは何を考えながら仕事をしているのですか」と、英語でお尋ねになりました。"What are you thinking?"

私は、何かくだらないことを考えていたと思うのですけれども、それを英語

で言うのも面倒くさかったものですから。何も考えておりません。”Nothing.”と、申し上げたのです。

それをお聞きになったら、その修練長が、とても厳しいお顔をなされたのです。そして、何とおっしゃったか。

「あなたは時間を無駄にしている。」”You are wasting time.”と、おっしゃったのです。

私は、アメリカ人のところで慣れていましたから、仕事も結構手早かったです。おしゃべりもせず手早く、そして、言われたことを言われたようにしているのに、なぜ叱られたのか。あなたは時間を無駄にしていると叱られなければいけないのだろうかと思いました。

そうしたら、シスターが今度は優しい顔つきになって、「同じ並べるのだったら、やがて夕食にお座りになる一人ひとりのために、祈りながら置いていってはどうですか」と。「お幸せに、お幸せに、お幸せに」と。それまで私は、「つまらない、つまらない、つまらない」、と置いていたのですが。

それが、同じ仕事をするのだったら、いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。それが入ってくるのです。つまり、つまらない、つまらない、つまらないと仏頂面をしている私に、やがてお座りになる一人ひとりのために祈りながら、絶えず祈りながら。何をするにも、小さなことをするにも。お御堂に行つて手を合わせている、そういうお祈りではなくて、どうぞ、ここにお座りになる方がお幸せに、そのお気持ちだと思います。

そして私に、「時間の使い方はそのまま命の使い方です」、と教えてくださいました。私たちが何気なくしているお仕事、それは本当に何気なくでかまわないのです。ですけれども、時たま立ち止まって、私はこれを誰のために、何のために、どういう意味を持っているお仕事なのだろうと考えて初めて、人間は神様の被造物として、神様が作ってくださったかけがえのない、理性と自由意思を持った人として、恥ずかしくないのだと思います。

それをそのシスターが私に、「ロボットと同じような仕事をしていては時間ももったいないですよ」、とおっしゃいました。本当にそうだと思います。近ごろは、ロボットもいろいろあるのだそうですね。私もこの間、修道院長に、「シスター、最近お掃除をするロボットがあるようです」と、それとなく言ったのですけれども、もう一言のもとに切られてしまいました。「そんなの自分でしたらどうですか」と。「はい、分かりました」と、引き下がってまいりました。

とにかくそのときに、私が本当に大事なことをお習いしたと思うのは、つまらなくするのは私なのだ。そして、同じことがすべてについて言えるのではなからうか。つまり、私たちはすること、英語だと”Doing to do.”それにとても気持ちを取られている、時間を費やしている。けれども、人間にとって大事なものは、することだけではなく、どういう気持ちですか、”being”。doingだけではなく、どういう人間としてするか。”being”という、その言葉を忘れては

いけないということを、しっかり教えていただきました。

私は、すればいいんでしょうすれば、という気持ちで仕事をしていたと思うのです。一刻も早く片付けて、汗を拭いてシャワーに当たって、そして、自分の部屋に入って勉強したり本を読んだり。そういう、この"doing"だけに気を取られていた私に、人間にとって大切なのは"being"、どういう気持ちで、相手に対してどういう心を持っているかということ。

そこで先ほどの、いつも喜んでいなさい。私の仏頂面が少し消えて、お幸せに、お幸せに、お幸せにと。たぶん自分の顔が、少し優しくなったと思います。それと同時に、お幸せに、お幸せに、お幸せにというのは、いつも祈っていなさい。どうぞ、その方がお幸せにおなりになるようにという祈り、それが同時に入っていたと思います。お座りになったシスターたちがお幸せになったかどうかは分かりませんが、不幸におなりになったかもしれませんが、でもそれが問題ではないのです。私が変わったのです。それまで仏頂面をして、どうして私がこんな仕事をしなければいけないの、なぜ私かと、そういう私が、ああ、そうではない、どんなお仕事も結局私の時間を使って、その時間を大切に使用しないと、そのお仕事自体が意味のないお仕事になる。

私たちには、意味というものが、人間の存在の根本にあると思うのです。ちょうど、ビクター・フランクルが『夜と霧』や『死と愛』という本に書いていらっしゃるかもしれませんが、私たちにとって大切なのは、意味を与えることができる人間であるということであって、したがって意味を考えないで、むしろ意味がないかのように物事を取り扱ってはいけないのだ、ということをお教えました。

つまり、ある意味で「置かれた場所で咲く」ということなのです。それが例え皿並べというつまらないお仕事をいただいた、そういう場所に私が置かれたとしても。または、お手洗いのお掃除にしても、草取りにしても、意味を与えることができるのは、私たち人間しかない。そして、与えなければもったいない、時間の使い方が無駄になる。

私たちは、広いお庭がございまして、草取りもよく駆り出されました。そしてあるとき、やはり修練長、厳しい方だったのですけれども、修練長がいつの間にかおいでになっていて、「あなた方を見ていると、草を取ってない、草をむしっている」、とおっしゃったのです。そのとき、本当にそうだったので。そして、そのときに修練長がおっしゃったのは、「今、悪の道に足を踏み入れて、そこから足が抜けぬ青少年がアメリカにもたくさんいるのですよ、あなた方は草を引き抜くときに、足が抜けますようにと、ちょっとでいいから祈ってごらんください」。

ああ、なるほどと思いました。無意味に、つまらないとか嫌だとかどうして私が、と言っても、草を抜かなければいけない。だとしたら、それを今度は有効に使うためには、「どうぞ、この草を1本、面倒くさいですけれども抜きま

すから、悪の道に入り込んで抜きたくても抜けない自分の足を抜くことができるような青少年に一人でもいいからしてやってください」。そういう何かコツのようなものを教えていただいたと思います。

私はそのときにつくづく、人間は環境の奴隷ではなく、環境の主人になることができる。お仕事はつまらない。そのつまらなさに負けていたら、環境の奴隷になってしまう。ところが、そのつまらないお仕事をある意味で尊いお仕事、誰かのためになるお仕事に変えることができるのは、環境の主人と自分になったとき。ああ、ありがたい、本当なら草を抜きたくても抜けない人が世の中にはいっぱいいるのに、私は抜けるのだ、神様、ありがとうございます、ということが言える。それを御姿として、私たちはいただいたのだと思います。

そして、ボストンカレッジなのですけれども、3年ちょっとで何とか学位を取りまして、日本に戻りました。そうしたら、母は生きて待っていてくれました、とても喜んでくれましたけれども、すぐに私は岡山という、行ったこともない。皆様に申し上げたら失礼になるのかもしれませんが、私自身は神戸から向こうに行ったことがなかったのです。そこへ、これまた派遣でございます。有無を言わず、命令です。

それで、東京で育った私でございましたけれども、岡山という鬼ヶ島があるという、何となく怖いところへ派遣されまして、言葉もちょっと分からなかったのですけれども、まあ、慣れたら聞けるだろうと思って、とにかく命令に従いました。

しかし、そこで、やはり私は思い上がっていたのです。自分はアメリカで5年間、厳しい修練長で鍛えていただいたのだ、私には何でもできる、ぐらいに思っていたのだと思います。

ところが、岡山に来てみますと、私はよそ者なのです。そしてその大学、ノートルダム清心という大学なのですけれども、そこを卒業しておりません。雙葉と東京の聖心と上智、そしてボストンカレッジ。

そして、年齢からいうと30で入りまして、まだ35でございましたから、まだそこにいらっしゃるアメリカ人のシスターたちから見たら、一番の若造なのです。それで、学校では一番上でした。翌年に私は学長になることを命ぜられまして、これも命令ですから、ええ、私が、と思ったのですけれども、とにかく36歳で学長になりました。

そうしたら、先生たちもなんかバカにしてくださっているみたいで。言葉を選ぶのにずいぶん苦労したのです。

とにかく今まで、二人ともアメリカ人の学長だったのです。私が初めての日本人の学長です。だから、「何でも言ってやろう、分からないとは言わせない。言葉が分かるはずだから」。それぞれ通訳を通して二人の学長さんがしていたのが、今度はもろに入ったのですね。

でも、私も母に鍛えられましたし、そういうこともございましたので、何と

かしておりましたけれども、やはり自分でも耐えられないときがありました。

たまたま、東京で学長会議があって、一番の新参者として一番の末席で、その学長会議に行ったのです。結構そこにもおしゅうとめさんたちがいらっしゃいました。私は、修道者というのは、結婚もしない、子どももない、お姑さんもいない、小姑もない、と思っていたのですが、…。

とにかく私は、かつての上司だった神父様のところへ行行って、「神父様、こんなはずじゃなかった。修道院というところは、お姑さんも小姑さんもおいでにならないところだと思ったけれども、結構難しいところですよ」、「神父様、辞めてもいいですか、ほかの修道会に行ってもいいですか、元の英語を使う職場に戻ってもいいですか」、と申し上げたら、その神父様がそれをずっとお聞きになって、揚げ句の果てに優しくおっしゃったのです。「あなたが変わらなければどこへ行っても何をしても同じだよ」、と返されました。

私は、慰めてくださると思ったのです。「つらいところにやって悪かったね」。

ところがそれは一つも出なかったです。ご自分自身が修道者。この神言会もそうですけれども、修道者です。たぶんご自分も、つらい思いをなさっていたのだと思うのです。私に、あなたが変わらなければ、どこへ行っても何をしても同じだよ、と言ってくださいました。

私は、本当に目からうろこが落ちたような気がいたしました。幸せは、人にしてもらうものではなくて、自分になるものなのです。相田みつをさんの言葉でしたけれども、幸せはいつも自分の心が決める、人に決めてもらうのではない。あの人がいなくなったらどんなにいいだろう、と思うときがありますよね、時たま。あの人がいるから私は仕事がやりにくいのだとか、人間ですから考えます。そしてそのたびに悪かったと、私なども思うのです。

人間ですから、いつも私を今こんな目に陥れたのは誰々ではないか、あの人さえいなければという気持ちを持ちました。ところが、その神父様が、「あなたが変わらなければどこへ行っても何をしても同じだよ」、と。ああ、私が変わるのだ、そこに発想の転換といいたいでしょうか、それまで人が悪い、いわゆる、『くれない族』になっていたと思います。「お辞儀をしてくれない」、「笑顔をしてくれない」、「このあいだしたスピーチを褒めてくれない」、「助成金を出したのにお礼も言ってくれない」、お礼を言ってもらおうと思うほうが間違いなのですけれども、やはり人間ですから、時には、「ありがとうございました、学長、助かります」、ぐらい言ってくれたらいいのにと考えていたのです。その『くれない族』になりました。

何より、修道院に戻ってもシスターたちは、「シスター、若いのにご苦労様」と慰めてくれるかと思ったら、くださらない。それは当たり前のことなのです。みんな一人ひとりつらいものを持っているのですから。ところが、一人ひとりやはり、慰めてほしい、優しい言葉をかけてほしい、ねぎらってほしい、褒めてほしい、謝ってほしい。この『くれない族』、何々してくれないになって

おりました私が、本当にそれで救われました。

そのときに、一人の方が私に『ほほえみ』という詩をくださいまして、これはデール・カーネギーという人が書いた本の中に、クリスマス商戦で、売り子に対して言った言葉らしいのです。

あなたが期待したほほえみが相手からもらえなくても、不愉快になる代わりに、むしろあなたのほうからほほえみかけてごらん下さい。ほほえむことができない人ほど、あなたからのそれを必要としている人はいないのだから。

初め読んだとき、私は損をすると思いました。私が期待したほほえみがもらえなかったら、シングルの損だと思います。なのに私のほうからその人にほほえみかける。これではダブルの損になる。でも、マイナスとマイナスでプラスになる。そう考えなかったら生きていけません。

私は、そういう発想の転換といいたいでしょうか、これを私たちがすることによって、幸せを他人任せにしないで、自分が作り出す道を考え出すことができるようになりました。いつも私たちは、自分中心に考えるのですけれども、やはり相手のことを考えるそのゆとりがあるかどうかです。

私どもの大学は、この南山と同じようにミッションスクールです。卒業間際に神父様をお呼びして、ミサを挙げていただきます。その後で、神父様のお話を伺うのです。

もうずいぶん前です、私がまだ学長をしていたころ。もうお亡くなりになりましたけれども、一人の神父様がいらして、これから卒業しようとする大学4年生に、「君たちはやがて卒業して結婚をするだろう」と。その当時は、今のような晩婚ではなく、どちらかという卒業して、割に早く結婚する。「君たちはやがて結婚するだろう。僕は神父。ここにいるシスターも結婚していない。僕は神父なので、家庭を持っていない。だから、よく分からないけれども、弁護士なので」。その方は珍しく日本人で弁護士をしていらして、神父様をしていらした。「弁護士なので、いろいろな問題をみんなが持ってくる。夫婦の問題、遺産の問題、しゅうとめとの折り合いの悪さ、いろいろなものを持ってくる」。

「君たちに、夫婦が仲良く暮らす一つの秘訣を教えてやろう。それは『“の”の字の哲学』と、僕は呼んでいる」。

夫が会社から帰ってきてドアを開けて「ああ、疲れた。1日働いてきて、ああ、疲れた」と言う。そうしたら、妻であるあなたは行って「疲れたの」と言ったらいい。「私だって疲れてるんです」。「本当にそうかもしれないけれども、それはちょっと待ちなさい」、とおっしゃったのです。

夫が戻ってきて「ああ、今日は暑かった」。妻は出てきて「夏だから当たり前」。そういうことは死んでも言うなど。

私は、学生の隅に隠れてじっと伺っていたのですけれども、ああ、これは修道院でも必要だなと。

やはり、自分のことだけをまず考えるのですね。私だって朝から遊んでいた

わけじゃないんですよ、朝からお洗濯もして何とかをして何とかをして何とかをして。あなただけが疲れているんじゃないのよ、と言いたいです。私でも言いたい。でもそれを「疲れた」と言って帰ってきたら、まずその相手の身になって「疲れたの」と。「暑かった」と言ったら「暑かったの」と言う。

それは、子どもさんに対しても同じです。子どもが帰ってきて、そして「ママ、今日僕、悲しかった。先生に叱られた」。「あんたのことだから当たり前よ」。

そのときに「ああ、そう、今日つらいことがあったの、ママに話してちょうだい。今日お友達にいじめられたの、どんないじめられ方したか話してちょうだい」。

そういう、自分は言いたいことがいっぱいあるのです、1日中うちにいると。最近そういうことが少なくなりましたけれども、それでも言いたいことがいっぱいある。私だってこれしたんですよ、あれしたんですよと。

でも、それをぐっと抑える。それを私は、小さな死という言葉で呼んでいるのですけれども、“Little Death”と。それは、自己管理、自己抑制。

今、スマホや携帯でいろいろ問題が起きていますけれども、結局子どもたちは親から習っていないのです、自己管理をすることを。もうこの時間になったら、テレビなりスマホをやめて、これをしなければいけないという自己管理、そして自己抑制。

それこそスマートになりたい方だったら、ケーキは二つよりも一つに。自己抑制です。これだけ食べたために、食べておきながら太って困るなんて、自業自得ですよ。それはあまり使ってはいけない言葉ですけども。私は自分に使っています。これはもう自業自得です。

ちょっと話がそれてしまいましたが、『“の”の字の哲学』というのは、自分の言いたいことをちょっと抑えて、まず相手の気持ちに添ってあげる。「そう、疲れたの」と。または「暑かったの」と。「今日は本当にうちも暑かったけれど、お湯が沸いているから、ちょっとシャワーでも使っていらっしゃい」と。そのように、自分が中心でなくて、相手にまず添ってあげる。子どもに対しても、またはお姑さんの介護をする方に対しても、添うというか、それはとても大事だろうと私は思います。

いずれにしましても、私自身は、自分が変わらなければ人は変わってくれないということをしつかりと神父様から言われまして岡山に戻りました。そして、前よりは少し我慢強くなったのですけれども、四苦八苦している私を見るに見かねて、淳心会という会のベルギー人の神父様が、そっと私に小さな紙切れを渡してくださいました。読んでみたら英語で書いてあったのですけれども、『置かれたところで咲きなさい。“Bloom where God has planted you.”』、そこに始まって、咲くということは、決して仕方がないとあきらめることではありません。咲くということは、あなたが幸せに生きて、周りの人を幸せにして、そして神様があなたをここにお植えになったのは間違いでなかったということのみ

んなに知らせると。私にぴったりの言葉でございました。

私はなぜ岡山に行かなければいけないのか。私はなぜまだ岡山に来たばかりなのに、翌年、2代目の学長さんがお亡くなりになったからということで、3代目として初めて日本人なのに、それも修道院に入ってまだ6年しか経っていない、その私がしなければいけないのかと。不平は、出そうと思えばいくらでも出る。でも、それを出したところでどうなるわけでもない。

だから、仕方がないとあきらめるのではなくて、ここが私の居場所なのだ。私が自分で選んだ場所ではないのです。修道院というところは自分で選ばせんから、選んだ場所ではなく、置かれた場所なのです。そして、そこで自分が笑顔になる、周りの人も明るくする。そうすることによって、神様があなたをここにお植えになった、種をここにお落としになった、それは間違いではなかったということを示す。それが大事なのです。それが「咲く」ということなのです。

どうしても咲けない。日照りが続いてお水がなくて、またはお水が多すぎて、または何かいろいろなことがあって咲けないときは、根を下へ下へ下ろして張りなさい。しっかりと張って、今度外へ出てきたときに、前よりもきれいに咲かせることができる。それがその詩に書いてありました。そして、そのとき私は自分のことでいっぱいだったので、これは私に戒めをいただいたのだなとあまり思わなかったのですけれども、最近になって、ああ、本当にそうなのだ。

私たちは、一人ひとり思いがけない病気でベッドに置かれる。または、お勤めをして、思いがけない部署に飛ばされる、または行かされる。そういうときに、ここが私の居場所だと思えることができるか。

うちに毎年600人ほど、ありがたいことに、女子大ですので、女子ばかり600人も入ってくれます。入学式の日、入ってくる学生たちを見ておりますと、中に何人かですけれども、下を向いて入ってくる。ああ、この人たちは不本意入学なのだと思いました。

そして、学長が挨拶しますし、私も短い挨拶をします。そのときに私ははっきり言うのです。「あなた方の中には不本意で、本当は国立や県立、そういうところに行きたかったのかもしれない。もしかしたら名古屋とか京都とか大阪とか東京とか、そういうところに行きたかったのかもしれない。岡山を出て、そういうところで勉強をしたかったのかもしれない。でも、親が岡山なら許してやると」。遠いところだとお金もかかるし、うちはこれだけだからできないということで、ある意味で不本意で入ってくるのです。

私は、はっきり言います。「私も不本意で」本当ですよ。それにしても、どうしてこんな笑顔ができるのだろう。やはり年ですね。亀の甲より年の劫。「私も挫折を味わっているのよ。不本意で、あるところを落ちて、そして決まったところへ入った」と。そして、それが縁で上智大学に勤めることができ、英語を習うことができ、話すこともできて、書くこともできて、ある意味で読むこともできる。

「あれがもし挫折をしていなかったら、つまり不本意な目に遭っていなかったら、今日の私はなかった。確かにほかへ入っていたら、ほかの私になっていたかもしれない。でも、本当に入りたいと思っていた大学に入って、幸せになったかどうかは分からない。でも、私はこの詩のとおり、置かれたところで、幸せに咲くつもり」。

「あなた方も、どうしてもいやになったら出ていってもいいですよ、自由ですよ。でもね、そこへ行ったから本当に幸せになれるか」。

私は、教育というものは、例えば不本意で入った人が4年経って出ていく。そして、ここに来てよかったと言ってくれたら、それで私の教育は満足だと。入りたくなかったけれども、入ってみたらここでいいお友達ができ、いい先生がいらして、そしてこういうこともできるようになると、それが教育だと思えます。

つまり、一人の人が変わるのです。そして変わるためには、一人ひとりが変わらないといけない。そのためにはエネルギーがいます。つらいときもあります。マザー・テレサがおっしゃっていました、「私は痛む愛が欲しい」と。

東日本に行って、ボランティアをして帰ってきます。噴火したところへ行ってボランティアをする。いいことですよ、たいしたことですよ。でも、私はそれができません。年齢からいっても、体の具合からいっても。そして、私はその代わりに、あるものを書きましたけれども、神様のポケット。神様がポケットを持っていらっしゃるか分からないのですけれども、神様のポケットに私がした挨拶が、時たま学生から返ってこないときがあるんです。耳栓をしている。イヤホンですか。悪気はないのです。でも、私もその日はちょっと機嫌が悪かったので、引き止めて、「おはようございます」と言ったのです。そうしたら学生はびっくりして、イヤホンを取って、「おはようございます」と言ってくれましたけれども、中には本当に悪気がなくて行ってしまう人もいれば、面倒くさいと思って行ってしまう人もいます。そのときに私は、腹を立てないようにしています。

それは、神様のポケットの中に、私の「おはようございます」を入れるのです。今、東日本では、仮設住宅で寂しく暮らしていらっしゃるお年をめした方、または一人きりの方、その方に神様、誰かを送ってください。そして、元気にしているかいと声をかけさせてください。私は「おはようございます」と返してもらえなかった。でも、いいのです。結局さっきのマイナスとマイナスでダブルになるというのと同じことであって、私は神様、あなたのポケットの中に入れましたから、それをあなたが一番よくご存じの、今必要としている人に返してください。私はいません。そうすることによって、私は世の中が明るくなると思えます。

平和、平和は大事です。私のように、戦争をずっと通り越して今でもジャガイモはいただくのですけど、サツマイモはいただかない。シスターたちが、「こ

んなに美味しいおイモなのに」。

「シスターはどうしてこんなに美味しいサツマイモを召し上がらないの」と。「私は戦争中に、ご飯の代わりにサツマイモしかいただけなかった時期が結構あったのよ。だから、私はサツマイモをいただかない」、どうしてもいただかないといけないときはいただきますよ。そんな話をするのですけれども。

結局、神様のポケットの中にお入れすると、一番いいときに使ってくださいなのです。私たちの人生というのは、置かれたところで咲かないといけない。これは一人のプロテスタントの牧師様が私にくださった詩なのですから、「天の父様、どんな不幸を吸っても、吐く息は感謝でありますように。すべては恵みの呼吸ですから」。

不幸の息を吸ったときと、感謝にして吐き出せるとき、間には時間が流れると思います。その間は苦しいと思います。どうしてこんな不幸が私を襲うのかと。

ところが、いつか私の父が死んで、10年経ってから母が「和ちゃん、感謝しなさいよ。お父様はあのときに、痛い思いをしてお亡くなりになった。でも、そのおかげで今日の私たちがあるのよ」と。そうなのです。神様は決して人の力に余る試練をお与えになりません。これだけは私は、自分の経験から申し上げます。きれいごとではないのです。

時たま本当に、神様、どうして私がこれだけ一生懸命あなたのために働いているのに、うつ病にならなければいけないのですかと。私は50歳で、2年間うつ病で苦しみました。ようやく治って今日に至っていますけれども、学生たちに、シスターもなったのよと言うと、学生が「ええっ、シスターでもなるのですか」と聞きます。うつ病と信仰は別です。でも、必ず治るから。お医者様のおっしゃるとおりにしてごらんくださいと。それが私には言えるのです。

つまり、人間というのは、神様からいろいろな賜物をいただいて、近ごろのことでしたら、なぜペットは死んでもいいのか、人間を殺してはいけないのか。こんな屁理屈をうちの学生も申します。答えるのはなかなか難しいですけど。

とにかく人間には、廃棄することができない魂がある。それが生まれたときから、どれだけ働いているか分からない。人によっては知的に、人によっては身体的にハンディを持っていらっしゃるかもしれない。でも、人と他の動物との違い、それは神の似姿として作られた人間。

それを私たちは、生まれたときがどうであれ、近ごろのように出生前診断というものができるようになる。学生たちは非常に迷っています。その学生たちと一緒に過ごす。そういう、ある意味で機械的であり、ある意味で昔は考えられなかった。それだけ理科学が発達しているのだと思います。

けれども、していけないこととしていいことがある。それをお母様、お父様、先生方がしっかりお教えにならないといけません。私は学生たちから嫌われて、どんなに意地悪ばあさんと言われても、教えます。「あなたたち、先生を先に

お通しして、その後から入りなさい。先生を先にお出しして、その後から出ていきなさい」。

信仰は持つだけのものではなく、信仰は生きるものだということを、私の母が「それでもあなたはクリスチャン」と言って教えてくれた。私は洗礼だけは受けて家に帰りました。しかし、信仰を生きていなかったのです。母に対しても他の人に対しても、生きていなかったのです。

そういうことを自分が変わることによって、人様が変わってくださるのを待つのではなくて、自分が発想を転換して、私が悪い、どこか私が変わらなければいけない、人様もお変わりになったらいい。でも、まず私が変わらなければいけない。その発想の転換を、神の似姿として作られた人間は持っています。環境の奴隷ではなく、環境の主人になる。それは、人間にだけ許されるものなのです。

発想の転換というところで、皆様方もそれぞれご自分なりにお考えいただいたらいいと思います。今まで人を悪者にしてきたけれども、私自身はどうなのか。今までこういうことはつまらないと思っていたけれども、つまらなくしていたのは自分ではないか。今まで人のせいにしてきたけれども、本当は私が変わるべきだと。発想の転換、これが人間にはできるのです。それをしなかったら、生きている甲斐がない。意味を見つけれないのです。

ちょうどフランクルが言いましたように、人間は意味で生きる、そう言ってロゴセラピーというものを編み出した。いろいろなセラピーが、アドラーとか、ほかの人で作られておりますけれども、あの人だけがロゴセラピー、人間は意味で生きる。どれほどお金を貯めていても、それを使おうと思った子どもが、交通事故で死んだらどうなりますか。お金はむなしのものになります。人間を生かすのは、意味なのです。ロゴスなのです。それを私たちは忘れてはいけないと思います。

最後に、私は、今日は私の一番若い日だと思って生きようと思います。実は、今朝、私は5時起きなのですけれども、5時になって、ああ、今日は起きたくない。何だか怖いらしいところへ、名古屋まで行かなければいけないと。本当にそうですよ。行ったことないようなね。昔、会議できたことはありますけれども。これは私が決めることなのだと。そう思って起きて、笑顔で顔を洗って、お御堂に行ってお祈りをして、そして御ミサにあずかって、それからこちらへ出てまいりましたけれども。

私たちはもうちょっと自分の生活の中に、さっきの『“の”の字の哲学』ではないですけれども、自分自身が中心ではなくて、相手様の気持ちに添う。そういう人間になることがとても大事だと思います。

そのためには、心の中の戦い、小さなとげ、それを自分で、イエス様は十字架の上でたくさん刺されて、血みどろになってお亡くなりになりましたけれども、私たちもある意味で、血みどろで生きなければいけない。母の受け売りで

すけれども、何もかもうまくいくと思ったら大間違いで、私たちはつらいことに耐えることができます。つらいことを笑顔で受け止めることができます。

今日は私にとって、北海道の零下24度の日に生まれてから一番年を取った日です。昨日のほうが若かった。明日、また1日年を取る。ということは、今日は私にとって一番若い日。皆様方もそうですよ。人ごとではない。その一番若い日をお互いにダイオキシンを出さないでいきましょう。

ダイオキシンは測れます。排気ガス、またはごみの捨て方が悪かったとか、いろいろなことで測れます。私たちの口から出る言葉は、「疲れた」と言って帰ってきた人に、「私だって疲れているのですよ」。「暑い」夏は当たり前でしょう。ある意味でダイオキシンですよ。空気が悪くなります。

子どもに対してもそうです。親の口から相手を否定するようなダイオキシンを出していないか。それよりも「よくやったね。お父さんもお母さんも褒めてあげるよ。あんたがどれほど学校ではできなくても、お父さんとお母さんにとっては宝なんだからね」。そういう、ダイオキシンを出すどころか、ダイオキシンを消すような、明るい人で私は今日1日を過ごしたいと思います。

今日は、正直なことを言ってしまうと、決して南山に喜び勇んで来たわけではないのです。ごめんなさい、つい本当のことを言って。うそを言うよりいいですよ。

そして、お互いに神様は力に余る試練は決してお与えにならない。試練は必ずそれを乗り越える力になる。そのことを信じて、今日のお話を終わっていきたいと思います。

お聞き苦しいところがあったと思いますが、お許しくくださいますように。

ご清聴くださって、本当にありがとうございました。

司会（グラバア）：

シスター渡辺、本当にありがとうございました。

それでは、これをもちまして公開講演会を終わりたいと思いますけれども、こういう豊かな時間をともに作り出してくださいました参加者の皆さんにも、心からお礼を申し上げたいと思います。今日にご参加いただきまして、本当にありがとうございました。